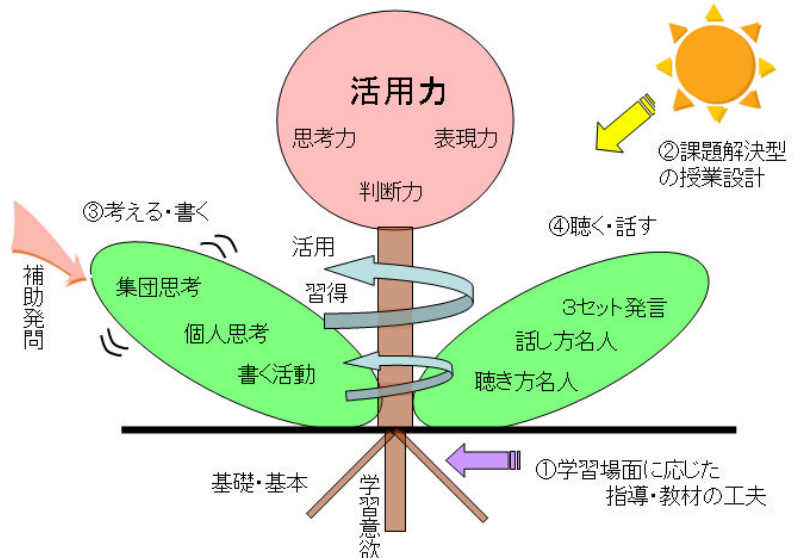


A-1 学校研究における授業の視点

①学習場面に応じた指導・教材の工夫

- ・活用力向上の工夫として、以下に述べる視点②～④の項目は学校全体で共通して行うものである。視点②～④を授業で具体化する段階で、教科や教材、学習場面に応じて様々な工夫（例えば、個別課題の設定、思考場面のルール、表現力を高めるレポートの形式など）が必要と考えられる。また、視点②～④とは別の切り口からの工夫（例えば、視聴覚教材の利用など）も多く存在する。これらの学習場面に応じた具体的な工夫を視点①とする。視点①の工夫は、指導案の授業展開や「指導上の留意点」「支援」の部分にあられる。
- ・将来的には視点①の工夫を類型化して、個人レベルから教科、学校全体へ広げていきたい。「各教科における判断力・思考力・表現力」を頭に置きながら、具体的な手立てに向けて教科の独自性を発揮する項目である。

自分の考えを持ち、関わり合い、深め合う授業の工夫



②課題解決型の授業設計

- ・授業の流れとして、**課題設定** → **個人思考** → **集団思考** → **まとめ** を基本とし、課題解決型の授業設計とする。
- ・課題提示への工夫があるか。意欲を高め、生徒の課題意識を明確にしているか。
- ・まとめがなされているか。生徒がわかったこと・学んだこと等を自覚できるか。

③個人思考・集団思考の場の設定と補助発問の導入

- ・学校研究のテーマ「自分の考えを持ち、関わり合い、深め合う授業の工夫」を具体化するものとして、「自分の考えをもつ」場面と「関わり合い深め合う」場面を取り入れる。「自分の考えをもつ」場面は **個人思考**、「関わり合い深め合う」場面は **集団思考** として指導案に標記する。
- ・**個人思考** では、**書く活動** を取り入れる。書く活動には、「意識的に考えさせる」「考えを自分の言葉で表現させる」「教師が思考を把握できる」の3つの意図がある。この段階で無答にならないよう、課題提示や支援を工夫する。
- ・**集団思考** では補助発問を行う。補助発問には、「考えを1つにまとめさせる」「方向を変える」「視点を増やす」など、思考にゆさぶりをかけて深めるねらいがある。生徒の発言や心の動きを十分に予想して、発問を設定する。

④聴き方・話し方の指導の工夫

- ・活用力（判断力・思考力・表現力等）を向上させる1つの手段として、聴き方・話し方の指導を工夫する。結論先行の話し方（本校では3セット発言と呼んでいる）を、授業で意識させる。

3セット発言

①主語・つなぐ

②結論

③理由



どうですか？